

## 平和の首都、希望の首都

今年<sup>1</sup>は明治維新から150年——。「地球のためのオリンピック」と謳われる東京五輪2020も控え、世界のなかでの東京と日本の位置を大きな歴史的視野で考えるべき時に来ていると感じます。そこで徳川江戸開幕、江戸中期の環境革命、そして明治維新と<sup>2</sup>いった幾つかの画期を振り返りながら、東京という都市と日本が果たしうる地球的な役割を考察してみたいと思います。

東京という都市は、それぞれの時代的文脈のなかで日本や世界全体のありようを変えるレジームシフト（構造転換）のハブとして機能してきました。

### ①「平和の首都」

たとえば400年前の江戸開幕は単なる遷都にとどまらず、戦国時代のゼロサム社会＝人口圧と土地・資源の制約から抜け出すために、弥生時代から続く西日本（京都・大坂）中心の国家体制から「東日本中心の国土構造」へと転換を図った、日本の大構造改革でした。

実際、東京湾に流れていた暴れ川・利根川を銚子方面に付け替え、江戸を洪水から守るとともに、その利水による関東平野の大規模な新田開発を行なったことで、その後100年間に米の生産高（当時のGDP）は倍増、人口も1.5倍と、見事にゼロサム社会からの離脱を果たしたのです。

その結果、もはや戦争（土地争い）をしなくてよい平和な社会（パックス・トクガワナ）が実現し、アメリカの歴史家から『鉄砲を捨てた日本人』、世界史に残る大デタント事例として描かれた世界が250年以上続きました。

江戸初期に焼失した江戸城の天守閣が再建されなかったのも、「もはや戦争の装置、戦国の世の象徴である“城”は必要ない」「むしろ城を再建しないことで、平和な世が実現したことを江戸庶民と全国から参勤交代で集まる大名に、明確なメッセージとして表示することが出来る」という観点からでした。

### ②「自然の首都」（環境文化首都、自然資本主義）

しかし、この17世紀の高度経済成長と人口増が、当時のエネルギー資源＝薪炭の消費急増につながり、山は荒れて洪水も多発（現代の環境危機の縮図）。

この資源制約・環境制約に対し、幕府は省エネや山林保護（禁足地指定・植林）を促進。ゴミや糞尿のリサイクル、効率的な省エネ火鉢（身辺だけ暖める）、森林管理など、「江戸はエコだった」と現在評価されるような環境文化がこの時代に育成されました。

これはJ. Diamondの名著『文明崩壊』で、環境破壊によって自滅した累々たる人類史の諸事例（マヤ、イースター他）のなかで、“環境破壊と資源制約からのV字回復”の唯一の記念碑として紹介されています。昔なつかしき「江戸のエコ」が、現代

と似た環境危機、資源制約のなかで、それに対するクリエイティブな応答として育成された社会文化 OS であるという事実、そして江戸という都市がそうした歴史的な「環境革命の発信地」（ハブ）としての役割を果たして来たという事実は、現代の文脈でリマインドしておく価値があることでしょう。

また、当時世界で唯一の100万都市だった江戸の経済を、自然資本を消し費やすことなく、むしろ森林再生や水田里山、糞尿・資源リサイクル（“元祖”都市鉱山）で自然の生産性と生物多様性を高めながら運営するという、生態系経済と人間経済の相乗（＝いわば「自然資本主義」）のモデルを創成していたということも特筆すべき点です。

日本の森（里山）も田んぼも、人の手が加わることでかえって豊かになった人工自然です。日本の自然観は、人間を地球環境に害悪をもたらすだけの存在として排除はしない。「工」という字は、天と地をつなぐ人の営みを表す——つまり人間は、やりようによっては天地をつなぐコーディネーターともなりうる。

こうした環境思想が、地球における人間の位置が大きく問われる現在、どれほど世界から求められていることか。それを歴史的な実績と具体的な技術集積を踏まえて提示できるのは、日本において他にないだろうと思います。

### ③「希望の首都」

その後、明治維新でも世界に類をみない無血革命で国体をドラスティックに転換。それは江戸期の地方自治・自立分散から中央集権的な国体への転換でしたが、日本の政体の特徴であった「権力」（武家幕府）と「権威」（天皇）の二元構造を統合するという点でも歴史的な日本の国体転換でした。江戸城が“皇居”となったのはその象徴であり、東京はその二元統合のシンボル都市となりました。

だが、この近代（19c～20c前半）における東京の位置を図るには、さらに世界という文脈で見る必要があるでしょう。というのもこの時代、東京は何より“アジアの首都”としての役割を果たしつつあったからです。

西欧列強による帝国主義と植民地支配が世界を覆いつつあった時代、東洋（アジア）の「希望の首都」たる東京が、孫文などアジアの俊英を集める求心力となり、東京は世界地図（少なくともアジアの未来を構想する人々にとっての“心の世界地図”）を大きく描き変える波紋の中心となっていたのです。

その「希望」とは、単に西欧列強の圧力に抗してアジアの国家としての自立を守る、そうした地勢的・軍事的な意味あいだけでなく、もっと高い目線での世界像・未来像でした。それは例えば岡倉天心の『東洋の理想』や『茶の本』に明確に謳われています。

「日露戦争に勝利した日本は軍事力、“死の技術”=Art of Deathにおいて一等国と世界から評価されるようになったが、そんな不名誉は返上しよう。日本はむしろArt of Life（生の技術）において正当な評価を受けねばならない。」——これがArt of Lifeの象徴としての「茶の道」を主題にした書を英語で世界に問うた所以でした。ちなみに「茶」とはもともと仏教寺院における医薬として発達し、禅や武士道を支え

る精神文化 OS となり、やがて庶民生活での日常所作の訓育システムとして浸透したという意味では、文字通り日本人の Art of Life = 「生命」「生活」「人生」のデザイン OS であったといえます。

再び矮小な国粹主義に陥ることなく、同時に戦後の平和ボケと歴史の忘却に留まることなく、当時の東京と日本が胎胚していた「世界のレジームシフト」の可能性の中心を、そうした「希望の首都」としての東京 TOKYO が発信していた理想と時代的役割を、未来に向けて継承・進化させるべき時と感じます。

\*

\*

\*

現代の地球と人類の状況を考えたとき、いま日本と東京が先導しうる世界のレジームシフト課題は数多くあります。そこに「自然の首都」「平和の首都」「希望の首都」という東京のコンセプトが再び重要な旗印として浮上してくるように思います。

具体的に何をなし得るか（すべきか）というアイデアは数多くあり、「触れる地球ミュージアム」や CPV 地球価値創造フォーラム等でも提示して来た次第ですが、いずれにしても東京五輪 2020 を前に、今こうした大きな歴史的な文脈のなかで「ポスト 2020」の日本と東京のありようを日本社会全体でしっかり考えるべき時ではないでしょうか？

皆様にとって、また日本と地球にとって、2018 年が新たな創発の時代へのスタートとなりますことを祈念いたします。（2018 年新春：竹村眞一記）